

既存品種「祝」より栽培しやすく収量が多い 京都オリジナルの酒造用水稲品種を開発

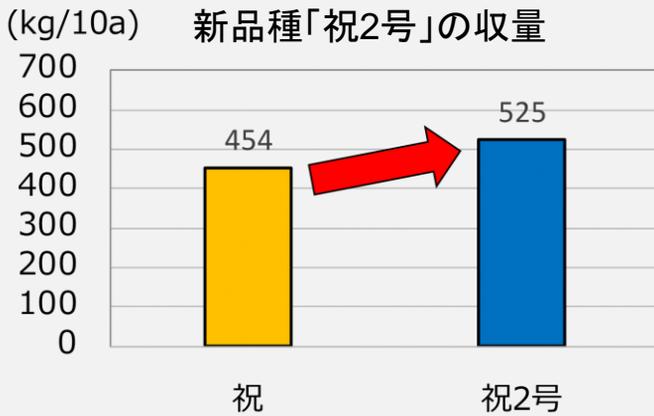
既存品種「祝」より草丈が短くて栽培しやすく、収量が多く、酒造適性の高い
京都府独自の酒造用水稲品種「祝2号」を開発しました。

背景
・既存品種は倒れやすいため栽培しづらく、収量が低いため、生産者から改善の要望があります
・酒造メーカーからは生産量の安定化が求められています

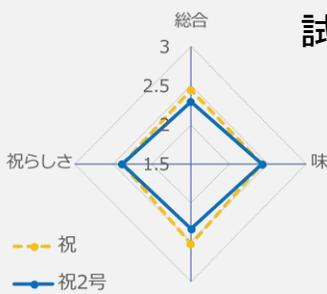
課題等
・栽培しやすく、安定的に収穫が確保でき、酒造適性の高い品種開発が必要です

●新品種の特徴

- ① 収量が16%向上(既存品種との比較)
- ② 草丈が短く、倒伏しにくい



- ③ 酒質は「祝」と同等の評価



試験醸造酒利き酒会



(図中の数値は小さいほど高評価)

- ④ 新品種に適した栽培方法の確立

栽培管理のポイント

- ・田植期 5月中～下旬
- ・株間 16～18cm
- ・施肥量 窒素6.5kg～7.5kg/10a
- ・水管理 強い中干しと早期落水を行わない

研究成果

- ・①収量が多い、②草丈が短く倒れにくい、③酒造適性が高い、新品種を開発しました。
- ・16%の収量向上が見込めます。

今後の展開

- ・本品種は令和4年に品種登録出願し(現在登録審査中)、令和6年から全面切替しました。
- ・新品種に適した栽培方法の普及・定着を図るため、タスクチーム活動による生産者への支援を行っています。